

私は今老妻と一人で五町八反の耕作をしています。

集団自決で生き残った七人の小学生

北海道 岩崎 スミ

故郷に広い田畑を残したまま、北海道農法を指導する
実験農家として、昭和十五年の春一家七人が渡満し、第
四次哈達河開拓団の実験場に入植しました。

土地は、肥沃でありましたが、電気もなく駅にも、学
校にも、病院にも、三里も離れ、狼の出没する所でした。
マッチ箱のような小さな家、きたない水、雨振れば泥濘
と化す道路、あまりの生活の激変でしたが、黙して耐え
心を一つにして頑張りました。

渡満を待っていたかのように、学校から訓導として迎
えられ、小学一年生から、寄宿生活する子供達と、寝食
を共にしながら、若い情熱のありったけをそそいで、深
夜まで教材研究に没頭いたしました。油のはいった皿に
布の芯を入れて灯火としますので、鼻の穴は真黒になりま

した。おおぜいの生徒をあづかり、教壇に立つだけの教
師では、間に合いません。今大阪府に引揚げていられる
高田成章先生が校長で、先生は、スパルタ教育でありま
した。鉄は熱いうちに打て、というご方針で親元から離
れて学ぶ幼い子達を、愛の権化で教育なさいました。寝
小便の子を夜中に起してまわるのも校長、しっこ布団の
洗い方を私に指導したのも校長、家庭でのご両親の役目
を、全部こなさなければなりません。まったくゆるみな
い緊張した毎日でした。熱血の教育者であった校長に私
は深く感動いたしました。

また新潟ご出身の吉田末吉先生は、毎朝ご自分のし
ぼった牛乳を寄宿舎生に飲ませ、舎監と教師をみごとに
果たし、早朝から深夜まで「一切合切の苦労なことは僕
にさせて下さい」とゆうふうには、生徒のために東奔西走
なさいました。この吉田先生、高田校長のような先生が
今の日本にいらっしやるでしょうか。私は素晴らしい先
生の下で勤めさせて頂きました。骨身を惜しまず、ひた
すら教育の仕事に邁進していただきましたのに、昭和二十年八
月九日ソ連の侵攻と同時に一瞬のうちに国境は戦場と化

し私達は関東軍から見離されたばかりでなく、捨て石とされてしまったのです。

日頃は兵隊さんのためにといて、自家生産のバターでさえも、自分達は食はず軍に納めていたのです。敵を欺くためには、味方であった開拓民を欺き、捨てねばならなかったのでしょうか。

八月九日、突然の避難命令に大抵の家は、夫や息子を召集されていて、婦女子と老人ばかりになっていたしソ連軍が国境を越えて攻めてくる、上空には二十機ぐらいのソ連の飛行機が、避難する私共に機銃掃射をあげてる。

非武装、無抵抗の子供を抱いた私達をなぜ射つのか。バラバラッ、バラバラッ、と貨車を撃ち抜く機銃掃射の音に、打伏してしまいました。私は東安の女学生五十人と、職員家族二十幾人かを引率していて、村人と避難行を共に出来ず、臨月の婦人三人を入れた私共の一隊は、一文の金もなく牡丹江神社で一晩中降る雨の中で体をよせ合い、立ちつくしたままの夜をすごし、ハルビンまで辿りつくのですが、私の村人達は執拗な機銃掃射に老父

を子を失いながら、日本軍も敗走する中を、どしゃぶりの雨、ずぶ濡れの衣類、着の身着のままに泥んこのぬかるみに足をとられ、一睡もせぬ夜道の行進、食べ物はやけて腐り、背中に負うた赤ちゃんは泣く声もかれ、胸に抱いた子は重く、両手に引っ張った児を連れ、信頼する、貝沼洋二団長について漸く辿り着いた。鶏寧県麻山でしたが、……。

前方には、ソ連戦車隊、後方には反乱軍が砲門も開いて迫ってくる。脱出の途はたれたかに思えたが、団長は拜むようにして兵隊さんに、婦女子の護衛をたのんだが、「我々の任務は開拓民の護衛ではない」とことわられ、三日前、団を出るときは、千人もいたのに被爆死したり落伍したり、行方不明になったりで、五百人足らずに減っていた。その殆んどが団長と共に集団自決の死をとげられました。

生きて虜囚の辱めを受けじと、潔く死を決し、祖国を遙拝し、君が代を歌い、別れの盃を水ですませ、掌中の玉として育ててきた、愛し児を抱きしめ、深い恩愛の涙をとめどなく流し、つみとがもない清らかな、天真爛漫

な大勢の子供を道づれに黄泉路に旅立たれました。四百六十五人の婦女子が集団自決したとき、奇しくも、母親の屍の下から、血に染まった七人の一年生が生き残りしました。私が担任していた一年生四十五人の内の七人でしたその七人の生徒から、直接聴いたところによりまずと、全員が目かくしの白布をくばられて、八月十二日午後五時、真赤な夕陽が、部落毎にかたまつて端座し、白はちまき白たすきの死出の装束の人々を、染めていたといひます。団長は皆の死を案内し自身のピストルで倒れ、それを合図に、目をおおはせる、合意の殺人自決が、麻山の丘を、真赤にそめて、数時間も続けられたといひます。

母の腹の下から、屍をのりこえ、どこからともなくより集まった、七人の一年生は心も動転し、昼は誰か人の気配かと感じれば、生きていては殺されるかと、毛布や上衣を被つて死んだふりをし、夜になると、冷たくなつた母にとりすがり、三日三晩飲まず食わずで泣きあかし、死にそこねて、地を這う人が「水、水」と求めれば幼いながら水をさがして与えた由、子供達の中には「僕

は死にたくない」と叫んで、逃げまどい。背後から射たれた人もいますと聞くと、集団自決のすさまじさ、悲しさ、惨さ、不憫さで、私は満州という言葉をまくだけで、教え子、村人、兄や母の最後を思い、嘆きの涙は乾くときがなかったのです。

麻山に自分の子が生きのこつたと知つた広尾郡広尾町野塚の高橋秀雄さんは、苦心して満人にばけて、子供にたくさんの土産を持つて三回も迎えに行ったのですが、二人の子供は、日本人の実の父の所に帰るのが決心がつかず、義母の背にかくれていたといひます。なぜときくと集団自決の名のもとに、射つてこられたのです。凄惨極まりない惨劇です。

このとき、生存した七人の子供は、その後麻山に進軍してきた、ソ連兵に発見され、日本人の屍の所に、物を盗みにきていた、中国人、張学生 of 馬車にソ連兵の命令で乗せられて、青竜の部落に連れてゆかれ「日本人の子供はいらないかいらないか」と、張学生がふれて歩き、それぞれ引きとられて養育されたのですが、傷つき血に染まっている体を拾い育ててくれた人達は、金があつた

り、物があつたり、生活が豊かであつたからではなく、どこの家も非常に貧しく、食事は一日一回でしか、どんぶりの中に、コウリヤンがおよいでいるおかゆをすする状態の生活であり、靴もなく孤児になつた子供は、毎日素足で馬や豚や鶏のせわをし、炊事洗濯と幼いながら義父母の気に入るように勤め、ある大風の日、その泥の家はドタアーンと倒れてしまつた。

そんな、困窮生活でも日本人の親なし子を養育してくれた中国人は、命の恩人です、慈悲の心です。これこそ、人間として一番本質的に大切な心ではないでしょうか。恵まれた生活の中にあつては得がたい、人間として一番大切なものを裸で放り出された大陸で、敗戦によつて、中国人の温かい人間性が教えてくれました。

麻山日本人公墓は、私達遺族が三回目の遺骨収集に行つたとき、中国の人達が方正の近くに建てて下さつてあつたものです。終戦時、奉天（瀋陽）まで避難した私は、奉天の陵南国民学校に勤務し、月給八百円でしたが米一升が百円に高騰し、昼の弁当はなしでしたから、生徒と雪の上で運動したりするととても空腹でした、満人

が、いい声を張りあげて「ターピンス マントウ」と売りにきたとき、たった一枚のターピンスを買う金しかなくて、それでも八人でわけて食べたのです。

学校は、校舎が次々と接収され、遂に青空の下で、木に黒板をさげて、授業をしました。子供は肩からカバンをかけて、それが机代りでした。

「日本鬼子、東洋鬼子、負けたんだぞ早く日本に帰れ帰れ！」毎日のように生徒が棒で打たれたりしますので、下校は送つて行つたりしました。

道でばつとつばをかけられたりします。日本人の血の純潔を守るため日本人女性は、老いも若きも、皆丸坊主頭になり、男装しておしろいの代りに灰をつけなるべく身を飾らないようにしましたが、ゲートルを巻き、戦闘帽をかぶり、国民服をきていても女性とわかられ、中国人の男がつかみかかろうとしたことがあるので、独り歩きはしませんでした。

合図によつて逃げ道が決まっていました、あるとき、ソ連の将校がうすくらやみの中を、私をみつめて追つてきました、命からがら走るといふことは、足のつけねも

はずれたようになります。

ソ連兵のおそろしかったこと、近くにゲベウ（ソ連の秘密警察）がいても、あの治安の悪さでしたから、外の地帯はどんなにひどかったでありましょう。

昼間、共に教科書をガリ版ですっていたその同僚が夜、発疹チフスで死んだとき、校長達と夜の葬儀に集まったが、凍土の中にその先生を埋めるとき、ついでにいた義勇隊の人々が、その先生の靴や服、毛布、皆はがすのです、かわいそうです。「生きている者が着るものがなくて」と言いました。奥地から着のみ着のまま夏衣一枚で避難してきた人は、家もなく、着物もなく、食べ物もなく、難民救済の手によって、どのくらい助けを受けられたかわかりませんが、あの厳寒の真冬に、素肌でモンペ一枚とゆう姿の人に遭い、姉の衣類を届けました。

私が奥地から避難したときに今、引揚げていらっしゃいます、久保利廣さまに新京でめぐり逢い、久保さまは私の指のひょう疽を治して下さいました。この、ご親切なお人に逢はるは無事届けて下さいました。この、ご親切なお人に逢はる

ねば今の私は生存していません。私の命の恩人です。

瀋陽に着いて一番驚いたことはある夜、一晚中ダダン！ダダン！と音がしていました。早朝窓からみると、昨夜まで建っていた大きな土台石も残さず消えていたこと、物資に困った満人達が何かの目的で持って行ったようでした。

頼みの綱の次兄が賞金つきで探し出され、兄は「逃げかくれはせぬ」と、馬鹿正直に出て行ってシベリヤに連れ行されましたので、二十一年六月十日突然の婦女子のみの強制送還開始のときは、一年生を頭に四人の子供を連れ、私は中隊長の役を仰せつかって東奔西走ぐったり疲れての帰国でした。

コロ島では土下座して並ばされ、女警が皆からとり上げた時計をバケツ一杯に持っていました。敗戦の口惜しさであります。

私は義姉の反対にもかかわらず、パンツの中に義姉の大切な、高価な指輪などを縫い込んで、日本に帰ってからの生活費にもと思ったのでした。発見されたら全員裸

にされて調べられると聞きましたが無事でした。博多が近づくとき皆甲板に出て日本の島をみて泣いていました、祖国は有り難いものです。上陸すると係官が「あなた方は、あちらでどうしていましたか、あなた方のようによい服装で帰った人ははじめてです。皆麻袋をこしにまいて帰りました」と教えられました。奉天（瀋陽）はゲベウのお蔭で治安がよかったからと思いました。

中共と八路が内線したときは、血ぬられた兵士の衣やホータイの洗濯を、強制的にご奉仕で洗濯を命じられました。鶏を徴発にこられたときも、子供が病気にしていたのであわれんで持っていきませんでした。引揚後は親達の経営していた農業を見習い豊かな心で楽しく働きたいと思ひ農業を一心にいたしました。が国策に添って渡満した人々の最後のいたましさは頭から離れず山野に屍をさらした人達にはふりそそぐ日光、赤い夕陽、山の鳥、狼の群の外には誰が訪れ一輪の花を供え、一本の線香をあげて下さったことでしょうか。

皆、非戦闘員でありましたのに戦にまきこまれ八万もの方が無念の死をとげました。

引揚げ当時の思い出

北海道 清水 久子

昭和十二、三年頃役場や小学校で、満蒙開拓の話で大分聞かされ、またポスター等も見かけました。

私は兄達四人が軍籍があり色々な話を聞いて育ったためか、女でも何かお国のためになることがないものかと考えておりました。

ちょうどその頃満州から嫁さんを迎えにこられた方がおり、他にも何人かの嫁さんを探している話を聞きましたので、反対する親兄弟を説き伏せて満州に行くことになりました。

十三年の四月嫁さんを迎えに来た方に同行して頂き、私その他二人の方と敦賀港から日本海を渡り朝鮮の羅津に上陸しました。

大きな汽車にゆられて林口、牡丹江を通り黒台の駅に着きました。主人になる方や大勢迎えに来て下さり、私